

## CMAC 会議(2013 年 6 月)出席報告

公益社団法人 日本証券アナリスト協会  
参与・教育第二企画部長  
金子 誠一

6 月 13 日にロンドンで開催された国際会計基準審議会(IASB)の CMAC 会議\*について概要を下記のとおり報告します。今回は、GPF 会議\*\*との合同会議(年 1 回)として開催され、日本から GPF 会議委員として本澤豊氏(ソニー)が出席した。

\*IASB と世界のアナリストとの会議。第 1 回会合は 2003 年秋。当協会は 2004 年 2 月の第 2 回会議から出席。会議は年 3 回、IFRS-AC 会議の前後にロンドンで 1 日かけて行われる。日米欧のアナリスト 10 名前後、IASB の理事 5 名前後、スタッフ数名出席。当初はトゥイーディー議長(当時)の私的アドバイザー会議の色彩が強かったが、IASB の会員向けニュースレター(Insight, July, 2005)で紹介され、2007 年 6 月の会議からは公開(傍聴可)となっており、公的な性格を強めている。設立以来、Analyst Representative Group(アナリスト代表者会議)と呼ばれていたが、2011 年 6 月の定款作成と同時に Capital Markets Advisory Committee(資本市場諮問委員会)と改称した。

\*\* GPF (Global Preparer's Forum : 世界作成者フォーラム) は、IASB が定期的に作成者の意見を直接的に聞く目的で 2007 年末から開催。メンバーは欧州 6 名、北米 4 名、アジア・オセアニア 3 名、その他の地域 2 名の計 15 名。メンバーは各社、各国、各地域などの出身母体の意見も参考にしつつ発言するが、基本的に個人資格での参加となり、コメントは個人のもので扱われる。GPF は、各回 IASB より提示されたテーマに関し IASB へインプット及び意見交換をするもので、その場で回答やコンセンサスを得ようというものではない。CMAC 同様公開されている。

### 記

#### 1. 概要

今回は 6 月恒例の GPF (作成者のグループ) との合同会議。テーマをディスクロージャー、概念フレームワーク、リースの 3 点に絞り小グループに分かれての検討を中心に議論した。概念フレームワークについては、ユーザー、作成者ともに純利益の表示・リサイクルリングを支持。ほんの数年前まで一部のユーザーを中心に純利益廃止論が盛んだったことを思うと感慨無量である。一方、リースについては、ユーザー側の支持は強い反面、作成者側からは、オンバランス化はしょうがないが、支払リース料のみを費用として欲しいという意見が出るなど、前途多難を予感させた。

#### 2. 議事一覧

番号	日時	議事
(1)	13 日 8:30-9:30	CMAC・GPF 別会合
(2)	同 9:30-10:00	IASB の基準開発動向
(3)	同 10:00-12:15	ディスクロージャー
(4)	同 12:15-13:15	概念フレームワーク
(5)	同 14:15-15:00	同上
(6)	同 15:00-17:00	リース

\*会議資料および録音は以下から入手できる。

<http://www.ifrs.org/Meetings/Pages/CMAC-Meeting-13-June-2013.aspx>

### 3. 議事概要

上記の議事番号(3)以降について、日本からの出席者の発言にも触れながら概要を報告する。

#### (3) ディスクロージャー

IASB は現行の開示規定に制約が多すぎるという批判に対応するために、IAS 第 1 号（財務諸表の表示）の部分的な修正を検討しており、これについて意見を求められた。ユーザーの側には営業利益（operating income）や EBITDA のような利益のサブトータル表示を求める声が高く、作成者側には利益表示や純負債の調整表（net debt reconciliation）を必要とする場合には、企業実態に合った柔軟な開示を求める声があった。

本澤氏から「何をどのように開示するか、マネジメントの判断にゆだねる柔軟性と、首尾一貫した表示と開示は、必ずしも対立するものではなく、両立しうるものであり、柔軟性の導入がかならずしもコントロール不能に帰結しない」というコメントがあった。筆者は「財務諸表本表に営業利益（Operating Income）を表示し、EBITDA を簡単に計算できるようにしてほしい、注記では統一した表形式の開示が望ましい、というのが日本のユーザーの多数意見である」という紹介をした。

#### (4.5) 概念フレームワーク

IASB が検討中の概念フレームワークのうち、OCI（その他包括利益）およびリサイクリングの是非について議論した。OCI と純利益の切り分け方法については、実現概念、マネジメント・コントロールの有無等、さまざまな意見が出たが、OCI 区分は必要であり、OCI で認識した項目はリサイクルすべきであるという点には、ほぼ全員が賛成であった。作成者はともかく、ユーザーのコンセンサスが得られた背景のひとつは先鋭的な意見を持つ北米系ユーザーの比重が減り、北欧系を初めとする穏健派が増えたことがあげられる。逆に言えば、数年前までユーザーのコンセンサス意見に地域的バイアス（北米系の過大重視）があったとも言えよう。

現在の IFRS にはリサイクルされない OCI 項目がある。このうち、年金について、筆者は当協会のコメントレターに基づき、年金基金とスポンサーとのあいだのキャッシュフロー（基金への拠出、または基金からスポンサーへの返戻）がリサイクリングのトリガーとなりうることを指摘した。

#### (6) リース

IASB は 5 月にリースについての再公開草案を公表、リースをタイプ A（主に不動産以外）とタイプ B（主に不動産）に区分した上で、ともにオンバランス化する提案を行っている。ユーザーは全てのリース（短期を除く）のオンバランス化に賛成する一方、一部の人は全てのリースに財務要素が含まれるので、支払金利を表示するタイプ A への一本化が望ましいという意見を述べた。作成者の側の意見は分かれたが、タイプ A・B への分離は複雑であり、全てのリース費用認識を定額化で一本化すべき（この点だけ考えればタイプ B と同じ）という意見が複数あった。本澤氏も「タイプ B は、不動産に限定するべきではなく、一部の重要性の低いリースも対象範囲に含めるべきである事、また、重要性の低いリースはオフバランスとなり得る事を許容すべきである」という意見を述べていた。

以 上